



Data

監督：本木克英
 脚本：谷本佳織
 出演：井上真央／三浦貴大／夏木マ
 リ／立川志の輔／吹越満／
 鈴木砂羽／舞羽美海／左時
 枝／柴田理恵／木下ほうか
 ／西村まさ彦／中尾暢樹／
 富樫真／工藤遙／吉本実優
 ／内浦純一／石橋蓮司／室
 井滋

👁️👁️ みどころ

今から100年前の1918年には、新型コロナならぬスペイン風邪が全世界で猛威を振るった。それと同じ時代、帝政ロシアではレーニン率いるボリシェビキが十月革命を成功させたが、富山県の“おかか”たちの女一揆は？

シベリア出兵と米騒動はいつ？そして、この両者にはどんな因果関係が？11都府県に緊急事態宣言が“発出”される中で実施された“大学入学共通テスト”にそんな問題が出たか否かは知らないが、高石友也が歌った「受験生ブルース」で受験時代を過ごした団塊世代はそれくらいは常識。

本作では、美人女優・井上真央が真っ黒な顔で登場し、富山県の貧しい漁師町での“米騒動”がスクリーンいっぱい展開。さあ、おかかたちは逮捕、弾圧、分断攻勢をいかにはねのけ、“米よこせ運動”をいかに「成功」させたの？日本史のお勉強は、本作ですっかりと！



■□■100年前の富山の“女一揆”が映画に！こりゃ必見！■□■

徳川時代には、有名な『郡上一揆』（00年）をはじめとして、さまざまな農民一揆が起きたが、山崎樹一郎監督の『新しき民』（14年）（『シネマ35』278頁）が描いた「山中一揆」を知っている人は少ないはず。しかし、今から約100年前に、富山県の“おかか”たちが起こした“女一揆”は、「米を安くよこせ」というものであったため、“米騒動”として有名になった。

本作の主人公は、富山県の貧しい漁師町で暮らす松浦いと（井上真央）。漁師の松浦利夫（三浦貴大）の元に嫁いできた彼女は、出稼ぎの漁に出た夫の留守中、3人の子供と共に女仲士として働いていた。しかし、1918年という第一次世界大戦でのドイツの敗色が強まる時代の中、日本では“シベリア出兵”が現実的な課題になるに伴って、米の値段が

上がっていた。肉体労働に従事する当時の日本の男は一日に一升の米を食べていたそうだから、一升20～30銭の米が、一升40～50銭に値上がりすれば、貧しい家庭には大問題。そんな中、いとたち「富山の漁師町のおかか」たちはいかなる行動を？

■□■なぜ米は沖の船に？漁師町の女たちは何を求めたの？■□■

2020年から21年にかけてマスコミは新型コロナウイルス報道一色になっているが、スペイン風邪がパンデミック化した100年前もそれと同じだったらしい。そんな時代状況下で、地元紙、「富山日報」は「米騒動」を報じたが、その内容は？

本作冒頭、『八日目の蟬』（11年）（『シネマ26』195頁）で、永作博美と共に素晴らしい演技を見せた女優、井上真央が、真っ黒な顔で重い米俵を背中に背負う女仲士の姿で登場する。この漁師町では、魚が獲れない時期になると、男たちは北海道や樺太へ何か月も出稼ぎの漁に出かけるため、留守を預かる女たちは約20銭の日当を目当てに、女仲士として働くらしい。米がまともな値段ならそんな日当でも何とかできるが、米価がどんどん高騰していくと・・・？

毎日いとたちが担いで浜まで運んでいる富山産の米は、沖に停泊する汽船に乗せられて北海道まで運ばれていくそうだが、なぜ地元で作った米を地元で食べられないの？それは、幼い頃から頭がよく、女だてらに（？）新聞にも目を通していいけどでもわからないらしい。そんな時に頼りになるのは、おかかたちのリーダー役である清んさのおばば（室井滋）。その姿形を一目見ただけで神がかっている存在だとわかるが、あの年齢にしては行動力も抜群！『スパルタカス』（60年）における「スパルタクスの反乱」は、ラストのクライマックスに登場したが、本作では、導入部で「米を安くよこせ！」と叫ぶおばばに続いて、いとたち多くのおかかたちが浜に突進！そんなおかかたちの行動について、地元紙はいかなる報道を？

■□■この新米記者の取材から見えてくる人物像は？真相は？■□■

地元紙の「富山日報」は、いとたちの行動を「女一揆」＝「暴動」と報じたが、これに興味を示した「大阪新報社」のデスク、鳥井鈴太郎（木下ほうか）は、新米記者のノノ瀬実（中尾暢樹）を抜擢し、取材のため富山に派遣。正義感あふれる彼は、さっそく地元で取材を始めたが、その取材先は？そこから見えてくる人物像は？真相は？

1914年にヨーロッパで始まった第一次世界大戦は、1918年に入ると、ドイツの敗色が濃くなると共に、帝政ロシアでは社会主義革命を目指す勢力が勢いを強めていた。もちろん、その思想は天皇制下の日本では厳禁だが、日本共産党が結党されるのは1922年だからまだ先のこと。また、小林多喜二や宮本顕治、宮本百合子（中條百合子）らのプロレタリア文学の登場も、まだ先の話だ。したがって、1918年当時のノノ瀬は正義感にあふれていたものの、社会主義思想はもちろん、政治体制についての知識や問題意識もろくに持っていないことは明らかだ。そんなノノ瀬が、いとや清んさのおばばに直撃取材したのは当然だが、その対極にある人物として取材したのは、大地主で町の権力者でも

ある黒岩仙太郎（石橋蓮司）。彼の前では警察署長の熊澤剛史（内浦純一）も最敬礼状態からすごい。また、地元では「鷺田商店」が米の販売を一手に握っていたが、その女将である鷺田とみ（左時枝）はかなり強欲。黒岩もそうだが、とみもだてに年齢を重ねているわけではなく、喋る言葉には十分な“説得力”がある。すると、一ノ瀬は持ち前の正義感だけでそれに対抗できるの？そんな不安を持ちながら観ていると、案の定・・・？

一ノ瀬が書いた記事は鳥井の下で何度も修正された挙句、「広く国民が求める記事」にするため、いとたちの「米よこせ運動」は、破壊を伴った数百人規模の「越中の女一揆」として報道されることになったからアレレ・・・。その結果、いったんは盛り上がっていた、いとや清んさのおばたちの「米よこせ運動」は、執拗な分断工作もあって次第に下火になっていくことに。いとの利発な息子、正一郎は、とみの策略に乗ってしまったいとを、「仲間たちを裏切った！」と罵倒したが、さて・・・。

■□■逮捕、弾圧、分断。その姿をじっくり鑑賞！■□■

山本薩夫監督の『戦争と人間』三部作（70年、71年、73年）（『シネマ5』173頁）の第3部では、軍部と手を組んで満州の利権拡大にひた走る五代財閥の動きをメインストーリーに描きながら、他方で、山本圭演ずる標耕平の革命闘争や、灰山（江原真二郎）たちプロレタリア画家たちのはかない抵抗も描いていた。あの時代、「天皇制打倒！」と主張すればたちまち「治安維持法違反」となることは確実で、それは今の香港情勢と全く同じだ。

そう考えると、レーニン率いるボリシェビキが、1918年に帝政ロシアを打倒する「10月革命」を成功させたとはいえ、それと同じ時代に、富山県の貧しい漁師町でおかかたちが「米よこせ！」と叫んで行動しても鎮圧させられるのがオチ。スクリーン上ではそんな想定通り、おかかたちに交じって動いていた老人が、「男だから」という理由だけで逮捕されたからアレレ・・・。このように、おかかたちの運動は官憲によって弾圧されると共に、おかかたちの運動は巧妙に分断されていくことに。

そこでは当然「アメとムチ」の手法がとられたが、その実務(?)を担ったのは、その手の“仕掛け”に長けた女・とみ。その巧妙な話術の前に、いとさえも「自分だけは米を安く売ってもらえる」というエサに屈服してしまったから大変。それによって腹いっぱい米を食うことができた正一郎は一時の満足を得ることができたが、いとが分断工作に乗ったことが仲間たちの前で暴露されると・・・？もっとも、とみによって巧妙に分断されたのはいとだけではなく、このおかかも、あのおかかも・・・。

他方、官憲の弾圧のターゲットがおかかたちの唯一無二のリーダーである清んさのおばばに向いたのは当然。容貌は悪いが性根は座っている清んさのおばばは、牢獄の中で果敢にハンガーストライキを決行したが、その運命は・・・？本作中盤では、そんな逮捕、弾圧、分断の姿をしっかり鑑賞したい。

■□■女一揆の行方は？このヒロインのクソ力は？■□■

レーニン率いる職業革命家集団であるポリシェビキでさえ、度重なる弾圧の前に挫折を繰り返したのだから、いとたちおかか集団の単純な「米よこせ運動」が当局の弾圧と、とみの分断工作の中で挫折したのは仕方ない。そんな実情に悲観し、また、自分の観念的な理想論の無力さを痛感した若手記者の一ノ瀬は失意の中で富山を去っていった。しかし、いとには逃げる場所などどこにもない。さあ、こんなギリギリの局面で、いとはどう考え、どう動くの？おかかたちの勢力の再結集など可能なの？本作ラストでは、多少漫画チックながら、極限状態まで追い込まれたいとが見せるクソ力、いや、底力をしっかり鑑賞したい。

『八日目の蟬』でもたくましい姿を見せていた(?) 井上真央だが、本作ラストではそれとは全く異質かつ少し漫画チックながら、そのたくましさとという点では共通する、素晴らしい姿を見せてくれるので、それを堪能したい。

2021 (令和3) 年1月15日記